

発話頭に現れる助詞「は」の使用とその相互行為上の役割：自然会話における文構造の一考察

著者	下谷 麻記
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	20
ページ	97-118
発行年	2010
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00005859/

発話頭に現れる助詞「は」の使用とその相互行為上の役割 －自然会話における文構造の一考察－

下谷麻記

要旨

助詞の「は」は、「対比」や「主題」を表わすことで知られているが、これまで、「(名詞句 X) は (述部 Y)」という規範的な文構造を前提として、名詞句に付随する形で現れるのが当然であるという認識の下、研究が行われてきた。しかし、自然会話における「は」の使用を考察すると、その規範的な文構造を逸脱した形で現れるケースがしばしば見られる。本研究は、そのような「は」の使用のうち、特に、発話頭で現れるもの、つまり、付随すべき名詞句から切り離された形で使用される「は」に焦点を当て、実際の会話データを基に考察していく。特に、それらが現れる文脈、会話の流れ、発話の配列パターンに着目し、発話頭の「は」が相互行為上、どのような役割を果たしているかということをも明らかにする。

【キーワード】 助詞「は」、対比、主題化、発話頭、文構造、相互行為、投射 (projection)

1. はじめに

日本語の文構造の特徴の一つに、助詞の存在が挙げられる。助詞は、一般的に、他言語の後置詞に当たるとされ、語(句)に付随して現れることで、それぞれの語(句)の統語的關係を示すという重要な役割を担っている(Kuno 1973, 4-5)。⁽¹⁾ そのため、助詞については、過去に行われてきた数多くの研究において、日本語の規範的な統語構造(SOV 構造)を基に考察されるというのが一般的であった(cf. Fujii and Ono 2000; Ono et al. 2000; Ono and Suzuki 1992)。しかしながら、日常会話にみられる助詞の使用を注意深く観察すると、そういった規範的な文構造からかなり逸脱した形で使用されたケースに遭遇することがしばしばある(Hayashi 2004a)。例えば、以下のような例がそれに当たる。

(1) Data 15

109. R: 一応今生化学っていうことで.
110. A: ふ:::ん°ふんふん°
111. (0.5)
112. A: え- で将来どうするつもりなんです?
113. → R: ↑は:::hah あ:::なんかもし行けたら国連とか:::,
114. A: [ふ:::ん
115. R: [そういうなんか国際機関で:::,
116. A: あそうなのふ:::ん

例(1)の 113 行目にみられる助詞「は」の使用に着目されたい。話者 R のこの発話は、113 行目の話者 A の発話（質問）を受けて、「は」から始まっていることが分かる。一般的に、助詞の「は」は、主題や対比を表わす助詞として知られており、「（主題 X）は（述部 Y）」という規範的な文構造の中で使用されると考えられてきた（三尾 1948；三上 1960, 1963；森田 2002；Kuno 1973；Shibatani 1990, 他）。そのため、過去の研究では、題目に当たる語句（または題目を指す指示詞）に直接付随した形で使用された「は」のみが考察の対象とされ、例(1)のようなケースは単なる発話上の誤りと解釈され、特に注目されることがなかった。しかし、こういった助詞の使用は、近年、若年層を中心に広く使用されるようになってきているのも事実である。そこで、本稿では、助詞「は」が備え持つ意味・機能とその発展的な使用、特に、発話頭に現れる「は」の使用に着目し、それらが相互行為（interaction）の中でどのような機能を果たしているのかについて、実際の会話データを基に考察していく。

2. 本研究の背景と目的

係助詞（または副助詞）の一つとされる助詞の「は」は、日本語の助詞の中でも特に、主題（題目）を表わす特殊な役割を果たすものとして、国内外の研究者の間で注目を集め、古くから数多くの研究が行われてきた（大野 1978；北原 1981, 堀口 1995, 三尾 1948；三上 1960, 1963；森田 2002；Clancy and Downing 1987, Kuno 1973；Kuroda 1987, Hinds 1987；Iwasaki 1987, Maynard 1980, 1987；McGloin 1987, Shibatani 1990, 他）。

これらの過去の研究では、主に「は」の現れる文構造上の類似点から、主語を表わす格助詞「が」と比較されることが多いが、その先駆的な研究の一つとして、三尾（1948）が挙げられる。三尾は、「場」という概念を基に、見聞きした事象を客観的

事実としてそのまま叙述する「場の文」と、ある事象について主体者の主観的な認識・判断に基づいて述べられる「場をふくむ文」にみられる文構造に着目した。前者は、一般的に「現象文」として知られる文で、「雨が降っている」のように「XがY(だ)」で表されるとされる。それに対して、後者は、「判断文」とも呼ばれ、「明日は雨だ」のように「XはY(だ)」の文型に現れ、題目となる事柄が「は」で提示され、その他の事柄と対比的に表現されることが指摘されている(永野 1986; 森田 2002 参照)。

このように、「は」の使用には、主体者の判断が介入するという特徴があることから、既に主体者が認識を持つ事柄、つまり既知情報(旧情報)との結びつきが強いことが指摘され、未知情報(新情報)との結びつきが強いとされる「が」と、統語的、意味的に区別されてきた(大野 1978; 北原 1981)。特に、Kuno (1973) は、「は」は、談話の中で「照応・予測可能な情報(anaphoric information)」、または、照応・予測を必要としない「総称名詞句(generic noun phrases)」⁽²⁾に付随する際に「主題(theme)」を表わすと述べ、それ以外の情報に付随する場合は「対比(contrast)」を表わすことを強調した。

しかしながら、これらの研究では、文レベルでの「は」の使用が考察の対象とされていたため、実際の談話における「は」の使用については、それまでの研究で指摘されてきた新旧情報の枠組や情報の照応・予測の可能性についての説明が当てはまらないケースが多く見られた。この問題を明らかにするために、1980年代以降、談話レベルでの「は」の研究が盛んに行われるようになった。

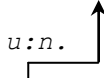
中でも、童話や小説などの書き言葉データを基に考察されたものとして、Maynard (1980, 1987)、Kuroda (1987)、McGloin (1986, 1987) などの研究が挙げられる。まず、Maynard (1980, 1987) は、情報の主題化(thematization)と非主題化(non-thematization)には、語り手の視点が大きく影響していることを指摘した。特に、談話の流れの中では、物語の登場人物など、一つの情報が読み手(聞き手)の意識下にある(と想定できる)ものかどうかということが、話を展開させる上で、語り手にとっては重要となる。そういった情報の活性状態を語り手がどのように捉えているか、それを「段階的に表明する言語形式(staging device)」として「は」と「が」の選択肢があると述べている。つまり、「は」は、主題として読み手(聞き手)の意識下に、ある程度留めておきたい情報(又は、留められていることが期待される情報)に附加され、そうでないと語り手が捉える情報⁽³⁾と区別する働きがあると説明している(cf. Kuroda 1987)。⁽⁴⁾

また、McGloin (1986, 1987) は、否定辞と共起する「は」の役割に着目し、「は」の使用と新旧情報との関係性は、「は」の現れる位置と否定の範囲に密接に関わっていることを指摘した。主には、主題を表わす「は」が否定辞と共起した場合、「は」は既知情報に付き、その情報を否定の範囲の外に置く役割を果たす。一方、対比を表わす「は」が否定辞と共起した場合は、「は」は未知情報に付き、その情報が否定の対象であることを示唆すると述べた。そして、これらの「は」と共起する否定表現が（その他の助詞と共起する表現に比べて）、談話の流れの中で引き起こされる否定表現（discourse-motivated negation）であることを主張した。

一方、話し言葉における「は」の使用に関しては、ナラティブや解説談話（expository discourse）のデータを基に、Clancy and Downing (1987) が談話上のまとまり（discourse cohesion）、また Iwasaki (1987) が叙述の範囲設定（scope-setting）という観点から考察している。特に、Clancy and Downing では、談話上のまとまりを全体的な結束（global cohesion）と局所的な結束（local cohesion）という二つのレベルに分け、話し言葉では、「は」は主に対比の文脈で局所的な結束性を示す役割を果たすことが述べられている。そして、Iwasaki (1987) は、「は」は旧情報や前方照応の可能な情報に付くのではなく、文脈から特定可能な情報（identifiable information）に付き、それについて叙述される内容の範囲を設定する働きを担っていると説明した。

この Clancy and Downing (1987) や Iwasaki (1987) らの研究では、上述の書き言葉データにみられる「は」の機能との関連性についても述べられているが、談話の種類によって、それぞれに特有の（または、特に際立つ）機能が存在することも指摘されている。特に、話し言葉では、発話の構成が、書き言葉にみられる明確な文構造と一致しないこともしばしば起こり、発話内の文法体系（grammar）が会話の参加者間でおこる相互行為（interaction）の影響を大きく受けることが明らかにされている（Ochs et al. 1996 ; Ono and Iwasaki 2002 ; Hayashi 2004a ; 西阪 2005 他）。上で紹介した例(1)にみられた「は」の使用も、その一例と言えるだろう。しかし、これまでの先行研究では、文レベル、談話レベルにおいても、名詞句に付随する形で現れた「は」の使用のみが考察の対象とされており、例(1)のような形で使用された「は」については、筆者の知る限り、これに関連した現象を扱った Hayashi (2004a) の研究以外に見当たらない。以下の例(2)は、Hayashi (2004a) で取り上げられている例の一つで、日常会話にみられる助詞「に」の使用に関する現象である。

(2) Hayashi (2004: 345) ⁽⁵⁾

1. Masaki: *s(o)yakara: a:no::u::moshi- (.)*
2. rokuji han *yatta yan NA::.*
3. Hiromu: *u:n.* 
4. → Masaki: ni: *tadoritsuite nakattaRA:,*

Hayashi (2004a) は、例(2)の4行目にみられるような助詞の使用について、相互行為と文法 (interaction and grammar) という観点から考察し、日本語の助詞には、付随すべき名詞句から切り離された状態でも、文法的な結びつきを作り出す機能があることを指摘した。そして、このような助詞の働きは、文 (sentence) として認識される構造の中に、別の談話 (discourse) を埋め込むこと (discourse-within-a-sentence) を可能にする働きがあり、相互行為の手助け (interactional resources) として、重要な役割を果たしていると主張した。

この Hayashi (2004a) の研究は、後置詞としての日本語の助詞にみられる機能に着目している点で、本研究の焦点となる「は」の発展的な使用とも密接に関連していると言えるだろう。しかしながら、Hayashi (2004a) の研究では、格助詞の「に」「が」「を」「の」が中心に取り上げられており、「は」については触れられていない。また、扱われた例が、切り離された助詞 (例2の「に」) と文法的な結びつきを持つ名詞句 (例2の「六時半」) の両方が、同一話者 (例2の Masaki) の発話内に存在するものに限られており、上述の例(1)で示した「は」の使用にみられるような、相手の発話を受けて、助詞で発話を始める例については言及されていない。従って、本稿では、そういった発話環境に現れたものを含め、発話頭に現れた「は」の使用に着目し、相互行為言語学 (interactional linguistics) の観点から、それらをさらに深く追究する。そして、これまで指摘されてきた助詞「は」の意味、機能と、新たな使用を可能とする「は」の特性との関連性を明らかにする。

3. データ

本研究では、インフォーマルな設定で行われた会話を録音し、文字化したものをデータとして扱った。これらの会話は2003年から2010年の間に録音されたもので、それぞれ4.5分から45分のセグメントで計28セット、総計時間は約7時間である。⁽⁶⁾ 会話の参加者は、日本語を母語とする大学生または大学院生で、20代から40代の男女

計 40 名 (延べ 59 名) である。会話の参加者数は一つの会話につき二名または三名で、話題は特に限定せず、自由に会話を行ってもらった。なお、これらの会話の文字化作業については、若干の修正を除いて、基本的に Jefferson (1989) による方法、規則、記号に従って行った。使用した書きおこしの際の記号 (Transcription symbols) については、付録を参照されたい。

以上の会話データから得られた助詞「は」の使用において、考察対象となるケース (つまり、名詞句に付随しない形で発話頭に現れたもの) は、全部で 14 例だった。使用頻度としては決して多いとは言えないが、この発話頭の「は」がかなり限定された文脈、会話の流れ、発話の配列のパターンで現れることを考慮に入れると、その使用頻度が、一般的に知られる「は」の使用に比べて低いことは当然の結果とも言える。また、有標 (marked) なケースが無標 (unmarked) なケースに比べて、使用頻度が低いことについてはこれまでも既に指摘されており、それらが構造的にも認知的にもより複雑な様相を見せることが知られている (Bybee 2007 ; Givón 1995)。これらの点を考慮すると、本研究の考察対象である発話頭に現れる「は」の使用も、使用頻度は少ないながら、自然談話におけるその使用の全体像を少なからず反映していることが推測でき、予備的研究のデータとしては考察に値すると言える。

では、発話頭に現れる「は」はどのような会話の流れ、発話の配列のパターンの中で起こるのか。以下に示すのは、本研究の会話データを考察した結果、明らかになった発話頭の「は」が現れる環境とそれぞれの使用例のまとめである。

<環境①>

- Turn 1: A: (焦点となる情報) の提示 + 相手の反応を伺う要素) ←
- Turn 2: B: (「うん」「はい」などの相槌や応答詞を含む発話)
- Turn 3: A: (は(::)) (述部：否定形や疑問を含む発話が後に続く)

<環境②>

- Turn 1: B: (焦点となる情報) の提示 + 「質問・疑問」を投射する要素) ←
- Turn 2: A: (↑)は(::) (質問・疑問の答えとなる発話)
- Turn 3: B: A の発話に対する反応・応答を表わす発話やそれに関する質問

<環境③>

- Turn 1: B: (独立した質問文・疑問文の形をした発話) ←
- Turn 2: A: ↑は:: (質問・疑問の答えとなる発話、又はそれに繋がる発話)
- Turn 3: B: Aの発話に対する反応・応答を表わす発話やそれに関する質問

使用環境	使用例数	韻律的特徴		全体
環境①	5例	は::)	ピッチ：顕著な変化はあまりみられない 母音の長さ：若干長音化されるものもある	14例
環境②	5例	(↑)は::)	ピッチ：顕著な上昇が伴うか、高めの発話 母音の長さ：長音化が伴うケースがほとんど	
環境③	4例			

表1 発話頭に現れる「は」が使用される環境とその使用例数

上記の環境①は、Hayashi (2004a) で紹介された格助詞の例 (例2参照) が現れる環境に類似している。つまり、発話頭の「は」が文法的な結びつきを持つであろう名詞句 (または名詞節) が、会話の相手 B の発話 (主に、「うん、はい」などの相槌や応答詞を含む発話) を挟んで、一つ前の話者 A のターン内に確認できるケースである。一方、環境②と③に現れた発話頭の「は」は、会話の相手 B の直前の発話を受けて、「は」で始まる発話が起こったケースである。Hayashi (2004a) で指摘された格助詞のケースと異なり、助詞「は」は②③のような環境でも出現が可能であり、また環境①に比べて、②③のように、相手 B の直前の発話を受けて起こるケースの方が、若干多いことも伺える。

次に、これらのケースの韻律的な特徴をみると、環境①に現れた発話頭の「は」は、その周辺の発話に比べて、ピッチや母音の長さなどに際立った変化は見られなかった。一方、環境②③に現れたケースは、①の現れたケースに比べて、ピッチの急激な上昇や高めの発話、また、母音に長音化がみられるなど、顕著な特徴が伴うものが多かった。特に、環境③に現れたケースは、最も韻律的な特徴が顕著に現れ、特に、ピッチはその周辺の発話に比べて顕著な上昇が見られ、また母音の長さに関しても、それぞれ長さは異なるが、全てのケースにおいて長音化が見られた。これらの韻律的な特徴は、それぞれ相互行為の中で重要な要素を担うため (Ford and Couper-Kuhlen 2004)、次節の考察で更に詳しく述べたい。

また、これらのケースの周辺の発話に見られる統語的特徴については、環境①～③の全てのタイプの会話の流れには、質問・疑問を表示する、または投射 (projection)

この会話では、13行目で、Yが焦点となる情報「持ってきたコート::?」を提示した後、聞き手Rの反応（14行目）を受けて、15行目の発話頭で「は」が使用されている。この一連の発話の中で注目すべき点は、話者Yが13行目で「もう思わず」と言った後、すぐに「そこで（新しい）コートを買った」ことを述べずに、一度マイクロポーズでその発話を中断し、「持ってきたコート」の状態を引き合いに出している点である。つまり、13行目の発話「もう思わず」は、その後に「何かをした」という発話が続くことを投射すると推測されるが、ここではその行動を表わす発話にすぐにつなげず、若干唐突に「持ってきたコート::?」についての発話が提示されている（13, 15行目）。この発話は、結果的には「新しいコートを“思わず”買った」理由に当たる情報であることが伺えるのだが、13行目の時点では、その直前の「もう思わず」という発話とどのように関わるのが分かりづらい。従って、マイクロポーズを境に、Yが発話の流れに若干の軌道調整をしたことが伺える。

このように、会話の中では、発話の途中でその軌道の調整・修正が行われることが頻繁にみられるが（Fox et al 1996 ; Hayashi 2004a）、発話頭の「は」が①のような環境で現れる場合は、特に、こういった軌道調整に関わる情報（例3では13行目の「持ってきたコート::?」）に上昇調のイントネーションを伴わせ、聞き手の反応を確認する傾向がある。そして、その反応（特に、話し手の更なる発話を促す「継続子（“continuer,” Schegloff 1982）」と呼ばれるもの）を受けて、助詞「は」で発話の続きを再開し、軌道の調整を行いつつ、最終的にまとまりのある発話を達成させることにつながっている。

また、この場合の発話頭の「は」は、いわゆる「主題」として取り上げる情報ではなく、対照の焦点となる情報を局所的に補足するという流れの中で現れるという特徴がある。そして、そうすることによって、その後の発話の軌道を微妙に調整・操作する働きをし、相互行為上の助けとなっている。つまり、例(3)の会話では、「持参したコート」があるにも関わらず「新たにコートを買う必要があった」という対照的な状況を、「は」を含む埋め込み文でもって局所的に補足し、それによって、話者Yが“思わず”とった行動の全体像をより具体的に描写しているのである。

このように、対照的な状況を局所的に補足するという場面では、例(3)にもみられたように、否定辞を含む表現の共起がしばしばみられる（cf. Clancy and Downing 1987 ; McGloin 1987）。同様の例として、例(4)を参照されたい。まず、この会話の背景として、話者MとYは、某大学で行われる日本語弁論大会を計画している日本語のティ

ーチングアシスタントで、日本語を取っている学生の大会への参加を促すためにはどうすればいいかということについて話している。

(4) Data 22

296. M: オーディエンスなんて何もしないでさ:::,
297. そこ行ってクレ- エクストラクレジットとかもらえて::,
298. (0.3)
299. Y: [まあね:::
300. M: [出る人は::: 作文書いて覚えて発表して::: って.
301. Y: う::ん.
302. M: それ::: [が目的-
303. → Y: [それなりに何かあれがある]のかね:::,
304. やっぱ申し込む°つつたら°
305. M: ↑ね
306. → Y: うん, 面倒くさいとか:::
307. (0.2)
308. M: う::ん
309. → Y: [はない]のかな:::,
310. (2.0)
311. Y: °申し込むのにね?°
312. (1.5)
313. M: なん- 二月九日までだよね:::
314. Y: うん.

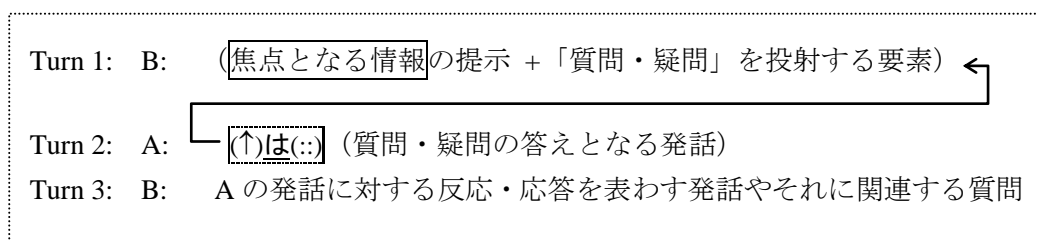
この会話では、303行目で、話者 Y が大会に参加する学生の側としての心境について「それなりに何かあれがあるのかね:::」(303行目)と述べている。この発話には、いわゆる“place holder”としての「あれ」(Hayashi 2004b)⁽⁷⁾が含まれており、「あれ」の指し示す内容として、306行目に「面倒くさいとか:::」という発話が付加されたことが伺える。しかし、それに対して、話者 M が遅れて若干鈍い反応を示したことで(307-308行目)、Y はその後、前の発話を、発話頭の「は」に繋げて「(そういう面倒くさいという気持ち)はないのかな:::」という否定辞を含む対照的な発話へと流れの軌道修正を行っている(309行目)。

この Y の一連の発話からも明らかな様に、どんな発話内容も、相手の反応次第で、その後の軌道に手を加える必要性が出てくる。そういった場合、特に、対照的な情報を局所的に補足することで、発話の軌道調整・修正に貢献しているのが、発話頭に現れる「は」である。このような「は」の使用は、複数の発話にまたがって現れる複雑な「文構造」を成す発話のまとまりを相互行為の中で捉える際に、理解を促す手助け

として機能していると考えられる。

4.2 環境②：対比・対照から主題（話題）化へ -- 「文構造」の協力的構築を通して

次に、上述の環境②（以下、再度参照）に現れた発話頭の「は」のケースについて分析、考察する。4.1 では、発話頭の「は」が指すと思われる情報が、その「は」を使用した話者自身の前の発話内に認められるケースをみてきたが、本節では、対話者の発話、特に「文」としては不完全な発話を受けて現れる発話頭の「は」に着目し、その相互行為上の機能を明らかにする。



上の図に示すように、この環境にみられる発話頭の「は」は、対話者の直前の発話が、文としては不完全ではあるものの、質問や疑問を投射する要素を含むものであり、それを受けて、発話頭の「は」でその答えとなる発話を切り出すパターンである。では、まず、例(5)から見て行くことにする。この会話は、同じレベルの日本語のクラスを担当する同僚同士のミーティングでの会話で、その冒頭の一部である。

(5) Data 11

1. K: はい(.) じゃあ::やりましょう::,
2. えっつとですね::, どうでした::?
3. → まずその::ファイナルのグループとか::.
4. → T: あ ↑は:: 分けました.
5. S: [分け-
6. K: [大丈夫
7. S: [はい, でき[ました.
8. K: [何の問題もなく.
9. S: はい.
10. K: うん. OK. で-
11. → T: [ただね::,
12. S: [おそらく
13. T: トピック:::ちょ↑ろつと話したん [だけど:::.,
14. S: [そうですね. 私も.

15. T: 具体的に(.)思い(.)浮かばないようなこと言ってたね,
 16. =女性問題(.) って書いてあったけど-
 17. =その::男と女の[とこ
 18. K: [うん.
 19. T: =まだやってないじゃない? (→ 続く)

例(5)の会話では、3行目のKの発話「まずその::ファイナルのグループとか...」を受けて、4行目でTが「あ↑は::分けました。」と応答している。このTの発話にみられる「は」は、「ファイナルのグループ」に付随したものと解釈でき、「XはY」という規範的な「文」を構成する要素が3-4行目のKとTの発話にまたがって現れていることを示している。このような環境に現れる「は」は、焦点となる情報についてのコメントや説明を促す発話、言い換えると、質問や疑問を投射する要素を含む発話に付随して現れているという特徴がある。実際、例(5)では、2行目で、まず話者Kが「どうでした::?」とお互いのクラスについての全体的な質問を投げかけた後に、具体的な内容として「ファイナルのグループ」という情報を提示しているため、「ファイナルのグループ」についての発話をTとSに促す流れとなっている。従って、「は」以後の発話は、その投射された質問に応じる形で、発話上の「文構造」を協力的に構築するという役割を果たし、相互行為を円滑にしていると言える (cf. Hayashi and Mori 1998 ; Lerner and Takagi 1999)。

また、例(5)において、「は」が付随する情報「ファイナルのグループ」は、規範的な文のSOV構造からすると「分けました」の対象(目的語)に当たる。そのため、4行目で使用された「は」の位置は、単純に考えれば、対象・目的を示す格助詞「を」の入る位置と言える。しかし、このような形で相手の発を受けて、「を」から始まった発話は、筆者のデータには見られなかった。ここで、「は」が選択された理由の一つは、やはり「は」が備え持つ「対比・対照」を示唆する機能が鍵となっていると考えられる。つまり、例(5)のTの発話「あ↑は::分けました。」は、「ファイナル (i.e. 期末プロジェクト) のグループ分けをした」というKの発話に対するフラットな応答ではなく、「グループ分けはしたものの、その他に補足したい内容がある」という含みを、発話頭の「は」で示唆しているのである。実際、Tの「↑は::」が韻律的に顕著な形で発話されていることや、10行目で、Kが「うん. OK.で-」と話を次に進めようとした直後に、Tが「ただね::」と11行目で問題点を切り出していることも、発話頭の「は」が単なるフラットな応答ではないことを証明していると言えるだろう。

このように、相手の直前の発話を受けて使用される「は」は、発話上の「文構造」

を協力的に構築する働きをすると同時に、会話の流れを“話者の視点”からみた流れへと移行させる役割を果たしているとも言える (cf. Maynard 1980, 1987)。この話者の視点には、当然、対比・対照を示唆する内容をはじめ、前の発話に関連した内容が含まれ、その後の会話の流れ、話題の方向性にも大きく影響している。助詞の「は」に「対比・対照」と「主題」を表わす機能があるとされてきたのも、この点に関連していると考えられるだろう (cf. Ueno 1987)。(8) 以下の例(6)は、このような「は」の備え持つ性質のうち、主題化に関わる要素（特に、「話題のシフト」に関わる要素）が、発話頭の「は」の使用に強く表れたケースの一つである。

(6) Data 15

56. A: ↑ え- 専攻は何なんですかここ。
 57. (1.0)
 58. R: え- まだ一年生なんで:::,
 59. A: うん。
 60. R: わかんないんですけど一応生化学を,
 61. A: [生化学ね:::
 62. R: [取ろうかな::は::い。
 63. A: は- で- (.) あの::: ○○選んだのは:
 64. → R: は::: 生化学がすごい (.) 有名だってことを:::,
 65. [ま::父親から聞いたんで::,
 66. A: [あ::そうなの?
 67. R: ま::是非 [°って感じで°
 68. A: [n- あ- ごめんなさいね- あ- あのじゃ- (→ 関連する質問へ)

(注: 63 行目の話者 A の発話「○○」には大学の名前が入る)

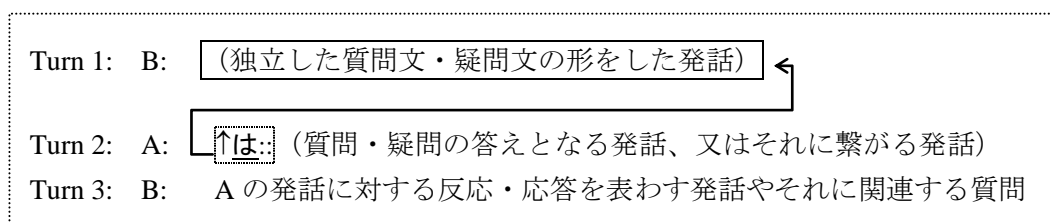
まず、この会話では、56 行目で A が R の専攻について質問した後、63 行目で R が ○○大学を選んだ理由について聞いている。この 63 行目の話者 A の発話「あの::: ○○選んだのは:」は、いわゆる分裂文 (cleft sentence) の一部となっており、その文構造を利用して、R の発話 (A の質問の答え) を促している。それを受けて、話者 R は、発話頭の「は:::」を使用し、A の発話を文構造上完成させる形で、その質問に対する答えを提供している。

会話の中で使用される分裂文は、その構造上の特徴から、話者のまとまった話（多くの場合、複数のターンからなる発話, multi-unit turns) を投射する働きがあるということが指摘されている (森, 2008)。この例でも、分裂文の前半部にあたる相手の発話を、「は」で受けて次に繋げ、この「は」で始まる発話が、その後の話題のふくら

みに影響していることが伺える。つまり、このような環境で現れる発話頭の「は」は、相手の発話で取り上げられた内容をさらに取り立てて提示する働きがあり、そうすることによって後につながる話題の組み立てや方向性を決める過程に貢献しているのである。

4.3 環境③：シフトされた話題の取り立てと発話計画のシグナル

最後に、上述の環境③（以下、再度参照）に現れた発話頭の「は」のケースについて考察する。本節で扱うケースは、相手が取り上げた内容を「は」で直接受け、それをさらに取り立てて後につなげるという働きをする点では、4.2 で示したケースに非常に類似しており、その関連性が伺える。しかし、それらと異なる点は、4.2 のケースが、相手の発話（特に、「文」としては不完全な名詞句や分裂文で現れた発話）を文構造上補う形で現れていたのに対し、本節で扱うケースは、相手の「独立した質問文・疑問文」の形をした発話をそのまま受けているという点で、「X（名詞句・名詞節）は Y（述部）」という規範的な文構造に当てはまらない形で現れていることである。



では、以下の例を参照されたい。この会話は、本稿の冒頭で示した例(1)と同様の例であるが、それに少し前後の文脈を加えたものである。また、この会話は、4.2 の例(6)で示した A と R の会話の続きにあたる部分でもある。（なお、ここでは以下の例は、便宜上例(7)とする。）

(7) Data 15 (= (1))

103. R: そういう(.) 色んな方面があのでー 免疫学だったり [が選べるので::,
 104. A: [う:::ん
 105. R: それを取っといた方がいいんじゃないかっていう [アドバイザーの
 106. A: [ふ:::ん
 107. R: 忠告で.
 108. A: あ:::そうだよな.

109. R: 一応今生化学っていうことで。
 110. A: ふ:::ん°ふんふん°
 111. (0.5)
 112. A: え- で将来どうするつもりなんです?
 113. → R: ↑は:::hah あ:::なんかもし行けたら国連とか:::,
 114. A: [ふ:::ん
 109. R: [そういうなんか国際機関で:::,
 110. A: あそうなのふ:::ん
 111. R: あの::: WHO って>ありますよね世界保健機関って<,
 112. A: はいはいはい[はい
 113. R: [あ:::いうそういうそういう機関で働きたい (→ 続く)

まず、この会話は、上述の例(6)で示した会話の流れから、話者 R が〇〇大学で生化学を専攻するに至った経緯が話題の中心となっている。そして、その話が一通り終息に向かったところで (108-111 行目)、話者 A が話題を若干シフトさせる質問を投げかけ (112 行目)、さらに話を続けているのが分かる。この A の 112 行目の発話「え- で将来どうするつもりなんです?」は、疑問を表わす終助詞「か」は付いていないものの、疑問副詞「どう」や上昇調のイントネーションが伴っていることから、独立した質問文・疑問文の形をした発話と捉えることができる。そして、この A の話題をシフトする質問文を受けて、それを丸ごと取り上げる形で、「は」が 113 行目の R の発話頭で使用されている。

同類の例として、もう一例、以下の(8)のケースを参照されたい。この会話では、まず、話者 H が通っていたニューヨークにあるバイリンガル教育の高校が話題に挙げられ、以下ではその高校についての話題が続いている。

(8) Data 17

99. H: その::: 四年制::: [なんですよ。
 100. Y: [う:::ん。
 101. H: んで:: んで- 日本の高校に合わせると三年制[になるんで:::,
 102. Y: [三年制:: うんうんうん
 103. H: 9 年生から[60 人入↑て::,
 104. Y: [うん。
 105. H: 10 hh 年生からまた 60 人入るって[いう:::,
 106. Y: [へ:::.....
 107. H: どっちでもいいよみたいな[(.....)
 108. Y: [あ::: そうなんだ。おもしろいね::=
 109. H: =で僕は 9 年から入ってたん[で::: 一応四年間:
 110. Y: [へ:::..... そっかそっかそっかそっか
 111. =え(.) じゃどういうふうに教育を受けていくの:::??

112. → H: n- n- ↑は: なんか:::,
 113. Y: 英語↑で::?
 114. H: m- え::半分英語で:::,
 115. Y: [うんうんうん
 116. H: [半分日本語ぐらいですね::
 117. Y: あ:::それなんか- 授業の一時間中半分英語で半分日本語?
 118. H: [いや- はい.
 119. Y: [それとも:::
 120. H: 授業によって:::日本語(.)あるいは英語って感じで (→ 続く)

この会話は、109行目までの文脈で、Hがニューヨークの高校に4年間通っていたことが細かく述べられているが、ここでも、その話がおおむね終結に向かったところで(109-110行目)、Yがそれに関連する質問(バイリンガル教育の高校のシステムについての質問)をし、話題の方向性を若干シフトしつつ会話の拡張を図っている(111行目)。そして、そのYの質問を丸ごと「↑は:」で取り上げる形で、Hが112行目で発話を再開させている。

この例(7)や例(8)に見られる発話頭の「は」の使用には、共通している点が三つ確認できる。まず、一つ目の共通点は、話題シフトのきっかけとなる質問を丸ごと受ける形で発話されているという点である。そして、二つ目は、3でも述べたが、韻律的に際立った特徴(特に、ピッチの急激な上昇や母音の長音化)があるということである。これら二つの特徴は、発話頭の「は」が、相手の質問内容をとりわけ取り立てる働きをし、会話の参加者がシフトされた話題に指向するのに一役買っていることを示していると言える。そして、三つ目の共通点は、話題シフトのきっかけとなる質問文が、疑問副詞や疑問限定詞(なんで、どう、どういうふうに、どのぐらい、どんな、etc)を含むもので、一言で簡単に答えられるような質問でなかったり、その質問に答えるに当たって触れる必要のある関連事項が複雑に絡んでいる様子が伺えるという点である。そのため、このタイプの発話頭の「は」の周辺には、途中で切れた発話(cut-off)や、発話末の母音の長音化の現象、そして、いわゆるフィラーにあたる「あ:::」「あの:::」「なんか」「え:::」などのようなターンを保持しようとする発話がみられ、まとまった発話を産出する上での発話の組み立てを話者が行おうとしているのが伺える。従って、このタイプの発話頭の「は」は、シフトされた話題を取り立てると同時に、その後の発話(特に、一言では説明しづらい内容)をどのように提示していくかという発話計画の組み立てを合図(signal)していると言える。そして、そのシグナルは、その後続く発話(つまり、質問の答えとなる発話)が及ぶであろう範囲を投射する働きを

しているとも思われる。そのため、会話の中では、談話標識 (discourse marker) 的な役割も担っていると考えられる。

以上、独立した質問文・疑問文としての発話に対して使用された、発話頭の「は」について述べてきたが、このような「は」は、質問や疑問を表わす全ての発話に対して出現するわけではない。上述のように、限られた文脈、会話の流れ、発話の配列パターン、そして話者が達成しようとする行為が助詞の「は」の備え持つ談話機能の助けを必要とする場合など、様々な条件が揃った時に起こると言える。比較的最近になって盛んにみられるようになった使用の一つではあるが、実際にこういった発展的な「は」の使用が可能となる背景には、Ochs et al. (1996) をはじめとする一連の研究で議論されてきた「文法と相互行為 (grammar and interaction)」の相互関係があると思われる。つまり、「は」の現れる規範的な「文構造」やそれが備え持つ言語学的な意味・性質が、会話における相互行為の中で様々な形で利用され、それと同時に、相互行為がまた「は」の機能や使用範囲を拡大するきっかけとなり、発話頭での「は」の使用を可能にしているのである。

5. まとめと日本語教育への示唆

本稿では、複数の発話にまたがって現れる複雑な「文構造」の一部として現れる発話頭の「は」の使用に着目し、その相互行為上の機能と役割を自然会話のデータを基に考察してきた。特に、発話頭の「は」が現れる環境には三つのタイプがあることを指摘し、それぞれの発話環境で使用される「は」と、その発話が絡む文構造、そしてそこで発揮される「は」の言語学的な性質が、どのように相互行為と結びついているかを明らかにしてきた。そして、それぞれの環境で、対照的な情報を局所的に補足することで発話の軌道に調整・修正を加えたり、相手の発話で取り上げられた内容をさらに取り立てて提示したり、そして、その後の発話の投射や、話題の組み立て、方向性の転換に貢献したりするといった様々な役割を果たしているということを指摘した。また、こういった会話における「は」の多様な働きを可能にしているのが、後置詞として膠着的な働きを持つ助詞の文構造上の特徴、「は」そのものが備え持つ「対比・対照」「主題化」といった性質、そして相互行為そのものであり、それらが複雑に絡み合い、調和した結果であることを述べた。

助詞の「は」は、日本語教育の現場においても、最も早い段階で導入される日本語の構文「XはYです」の一部として重視されているが、その複雑な概念から（また、

統語的に類似した語順に現れる格助詞の「が」との混乱から)、学ぶ側にとっても、また教える側にとっても、厄介な項目の一つとして挙げられることが多い。また、その「XはYです」という文型(と日本語におけるSOVの統語構造)を念頭に置いて教えることが重視されるため、助詞は名詞(または名詞句)に付随するものであり、発話頭の「は」のような助詞から始まる文は存在しないというのが日本語についての日本語教育現場での一般的な認識と思われる。そのため、本稿で取り上げたような言語現象は、一見、日本語教育上は、単なる文法的な「間違い」として認識される可能性があり、あまり注目されることがなかったかもしれない。

しかし、日本語の助詞が、付随すべき名詞句から切り離された状態でも、文法的な結びつきを作り出す機能を持つということに関して言えば、日本語学習者の発話を観察していても、そういった助詞の機能を把握した発話がしばしば見られることがある。日本語の教育現場に携わる先生方であれば、例えば、以下のような場面に遭遇した経験はないだろうか。学生がある単語忘れて文を完成させられず、つまづいているところに、教師がその単語を与えると、学生がその単語を繰り返さずして、助詞から発話始め、その後の発話を完成させようとするといった状況である。筆者の記憶では、格助詞の「が」「を」「に」「で」あたりの助詞で行われることが多いようにも思うが、まれに教師に分からない単語の質問をし、その答えの言葉を受け取った後、学習者が「は」で発話を再開させようとするということもある。このような場合、教える側としては、当然、忘れていた(分らなかった)単語をもう一度確認し、始めから完全な文として言わせ直すといった作業をする場合が多いことが想像される。この作業自体は、もちろん単語や文型の定着を図る上で大切な作業であり、必要なものであることは疑わない。ただ、相互行為言語学の観点からみると、この状況は、会話にみられる助詞の強力な膠着材としての機能を学習者が把握していることを示す発話行為であるとも言え、単なる文法の間違いと混同すべきではないだろう。

また、助詞の「は」の使用に関しては、まずは文法的な正確性を身につけることが教育現場の一つの目標であり、当然、学習の順番としても優先されるべきことであるが、本稿でみてきたような、「は」の発展的な使用も、若い世代を中心に、今後さらに盛んになることも予想される。教える側としては、こういった言葉の変化にも敏感であり、そういった変化に対応できる知識と柔軟な考えを持って、日本語教育の現場と言語研究に向き合える姿勢を保っていききたいものである。

最後に、本研究の今後の課題として、やはり考察の対象となるデータベースを拡大

し、今回の予備的研究では確認できなかった部分をさらに開拓していく必要があると言える。特に、発話頭の「は」の使用に関しては、個人差や世代差も大きく影響していることが予想される。まだまだ研究の余地が残っているが、少なくとも、今回の研究が、その先駆けとして、言語学の分野に貢献し、また、助詞「は」の機能をさらに深く理解するきっかけとして、日本語教育の現場に関わる人たちの間にも幾分か貢献できる内容となっていることを祈りたい。

謝辞

この度、長年に渡り国際交流活動にご尽力された関西外国語大学山本甫国際交流部長がご退官されるというご報告を受け、関西外国語大学の教員として、また日本語プログラムの一員として、山本部長の国際交流への多大なるご貢献と、日本語教育現場を通して賜った数々のご支援に、深い敬意と感謝の意を表します。

注

- (1) 助詞には、終助詞の「よ」「ね」「わ」などのように、発話内容に対する話者の態度を表わすものや、間投詞の「ね」などように語句に付随することなく単独で使用可能な助詞も存在するが、本稿ではそれらは扱わない。
- (2) 総称名詞句 (generic noun phrases) とは、人、動物、物などの総称を表わすもので、例えば、一般的に言う「人間」、「アメリカ人」、「猫」、「食べ物」などがそれに当たる。Kuno (1973 : 41-42) によると、これらの総称名詞は、談話上、話し手／聞き手の登録情報として既に存在するものとして扱われるため、照応・予測しなくとも、助詞「は」が付加され主題として成り立つとされている。
- (3) Maynard (1987 : 79) によると、「が」は、ある情報に付加することで、その情報に対して、一時的に読み手（聞き手）の注意を喚起する働きがあることが指摘されている (cf. Kuno 1975)。そして、主題化された情報（「は」が付加された情報）との相互関係を通して、間接的に話題の展開に貢献すると述べている。
- (4) この Maynard (1987) の指摘する語り手の視点と「は」の使用の関係性については、Kuroda (1987) においても類似した議論が展開されている。Kuroda の研究は、外国文学作品の日本語訳データを基に考察されたものであるが、主に、直接引用を表わす動詞 (quotative verbs: ask, said, etc.) の動作主に付く助詞が、「は」であるか「が」であるかという点に着目し、その選択が語り手の視点に左右されることを指摘している。
- (5) 原典のトランスクリプトで表された音声的・韻律的要素を損なわせないため、この例のみローマ字表記のままとした。ただし、本稿が日本語によるものであるため、単語毎の用語解説と英訳は省略した。

- (6) この約7時間分の会話データのうち、1.5時間分は Carthage College の王彦氏に提供して頂いたものである。
- (7) 指示詞「あれ」は、ターゲットの言葉が見つからない際に、その場の発話構成の埋め合わせとして使用されると同時に、それが指し示す発話が後に続くことを投射する相互行為上の働きがあることが指摘されている (Hayashi 2004b)。
- (8) この点に関しては、Ueno (1987) による歴史言語学的観点からの考察が興味深い。Ueno (1987: 256-257) によると、「は」は、10世紀頃の資料では「対比」を表わす助詞として主に使用されており、11世紀頃から「主題」を表わす機能が派生して使用されるようになり、後に二つの機能を果たす助詞として定着したと述べられている。

Transcription symbols

(.)	マイクロポーズ
(秒数)	沈黙の長さ
hhh	吐く息
.hhh	吸う息
あ-	発話が途中で切れていることを示す
=	次のターンへとよどみなく繋がっていること (または急いで次に移る発話) を示す
[重複する発話の始まり
]	重複する発話の終わり
あ:::	引き延ばされた発話
°あ°	周囲の発話より小さく発話されていることを示す
あ	きしみ音 (creaky voice) を示す
↑↓	矢印のすぐ後の発話が急に高い (または低い) ピッチで発話されたことを示す
.	下降調のイントネーション
,	継続調のイントネーション
?	上昇調のイントネーション
> <	発話のテンポが速くなっていることを示す

参考文献

- Bybee, J. (2007) *Frequency of use and the organization of language*. Oxford: Oxford University Press.
- Clancy, M. P. and Downing, P. (1987) *Wa as a Cohesion Marker*. In Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. 3-56, Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Fox, B., Hayashi, M., and Jaspersen, R (1996) *Resources and repair: A cross-linguistic study of syntax and repair*. In Elinor Ochs et al. (eds.), *Interaction and grammar*, 185-237. Cambridge: Cambridge University Press
- Fujii, N. and Ono, T. (2000) *The occurrence and non-occurrence of the Japanese direct object*

- marker *o* in conversation. *Studies in Language* 24: 1–39.
- Givón, T. (1995) *Functionalism and Grammar*. Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Hayashi, M. (2004a) Discourse within a sentence: an exploration of postpositions in Japanese as an interactional resource. *Language in Society* 33, 343–376.
- _____. (2004b) Projection and grammar: notes on ‘action-projecting’ use of the distal demonstrative *are* in Japanese. *Journal of Pragmatics* 36, 1337-1374.
- Hayashi, M and Mori, J. (1998) Co-Construction in Japanese Revisited: We Do “Finish Each Other’s Sentences,” In N. Akatsuka, H. Hoji, S. Iwasaki, S. Sohn and S. Strauss (eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, Vol.7, 77-93, California: CSLI.
- Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (1987) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Hinds, J. (1987) Thematization, Assumed Familiarity, Staging, and Syntactic Binding in Japanese. In Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. 83-106, Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Iwasaki, S. (1987) Identifiability, Scope-Setting, and the Particle *wa*: A study of Japanese Spoken Expository Discourse. In Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. 107-141, Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Jefferson, G. (1989) Preliminary notes on a possible metric which provides for a “standard maximum” silence of approximately one second in conversation. In D. Roger, P. Bull, (eds.) *Conversation: an interdisciplinary perspective* (pp166-196). Clevedon: Multilingual Matters.
- Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge: The MIT Press.
- Kuroda, S.-K. (1987) A Study of the So-Called Topic *Wa* In Passages from Tolstoi, Lawrence, and Faulkner (of Course in Japanese Translation) In Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. 143-161, Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Lerner, G. H. and T. Takagi. (1999) On the place of linguistic resources in the organization on talk-in-interaction: A co-investigation of English and Japanese grammatical practices. *Journal of Pragmatics* 31: 49-75.
- Maynard, S. (1980) *Discourse functions of the Japanese theme marker wa*, Dissertation, Northwestern University.
- _____. (1987) Thematization as a Staging Device. In Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. 57-82, Philadelphia: John Benjamins Publishing.

- McGloin, N. H. (1986) *Negation in Japanese*. Edmonton: Boreal Scholarly Publishers.
- _____. (1987) The Role of *Wa* in Negation. In Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. 165-183, Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Ochs, E., Schegloff, E. A, and Thompson, S. A. (1996) *Interaction and grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ono, T. and Iwasaki, S. (2002) Toward an understanding of ‘sentence’ in spoken Japanese discourse: Clause-combining and online mechanisms. In Kataoka, K. and Ide, S. (eds.), *Culture, interaction, and language*, 103–31. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Ono, T. and Thompson, S. A. and Suzuki, R. (2000) The pragmatic nature of the so-called subject marker *ga* in Japanese. *Discourse Studies* 2:55–84.
- Ono, T. and Suzuki, R. (1992) Word order variability in Japanese conversation: motivations and grammaticization. *Text* 12: 429-445.
- Schegloff, E. A. (1982) Discourse as an interactional achievement: some uses of “uh huh” and other things that come between sentences. In Tannen, D. (ed.), *Georgetown University on Language and Linguistics*. 71-93, Washington, DC: Georgetown University Press.
- Shibatani, M. (1990) *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ueno, F. N. (1987) Functions of the Theme Marker *Wa* from Synchronic and Diachronic Perspectives. In Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. 221-263, Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- 大野晋 (1978) 『日本語の文法を考える』 岩波書店
- 北原保雄 (1981) 『日本語の世界 6・日本語の文法』 中央公論社
- 永野賢 (1986) 『文章論総説 -文法論的考察』 朝倉書店
- 西阪仰 (2005) 語句の配置と行為の連鎖: プラクティスとしての文法. 片桐恭弘・片岡邦芳編『講座 社会言語科学 第6巻 社会・行動システム』 176-201. ひつじ書房
- 堀口和吉 (1995) 『「～は～」のはなし』 ひつじ書房
- 三尾砂 (1984) 『国語法文章論』 三省堂出版
- 三上章 (1960) 『像は鼻が長い』 くろしお出版
- _____. (1963) 『日本語の論理 -ハとガ』 くろしお出版
- 森純子 (2008) 会話分析を通しての「分裂文」再考察 -- 「私事語り」導入の「～のは」節『社会言語科学』 10(2), 29-41.
- 森田良行 (2002) 『日本語文法の発想』 ひつじ書房